主体的に自立と共生を目指すことのできる生徒の育成
～家族・地域とのつながりにおける問題解決的な学習を通して～

埼玉県中学校技術・家庭科教育研究会第５分科会
川口市立上青木中学校　教諭　渡辺　かおり

１　はじめに

ここ数年、日本だけにとどまらず、世界中が大きく変貌していることなどは、日々の様々な情報から読み取ることができる。とりわけ、日本が直面している社会課題のうち、少子高齢化社会については、諸問題とその政策が繰り返し発表されている中、社会の変化に対応した家庭分野における内容の見直しとして、内容Ａ「家族・家庭生活」においては、家族や地域の人々と関わる力の育成が重視されている。また、ＡＩ（人工知能）技術の進展とネット社会の急加速度的な変化や学校生活でのICT 環境の充実に伴い、それらを活用した「指導の個別」や「学習の個性化」を軸とした個別最適な学習も求められている。今後も生活が様々な方向に急速に変化しようとも、それを主体的に受け止め、よりよく対応できる力が技術・家庭科の目指す資質や能力であり、その力の獲得のため、生徒が主体となり課題の解決に向かう授業改善が求められている。

このようなことから、第５分科会では、引き続き主体的に自立と共生を目指すことのできる生徒の育成を目指して研究を進めた。

２　研究のねらい

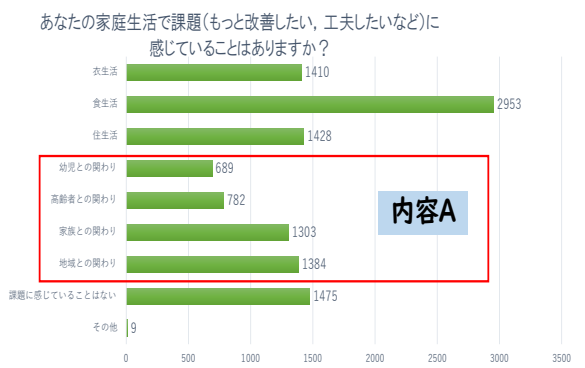
（１）生徒の実態

研究を進めるにあたり、南部地区５５校の生徒約 8、500 人を対象にアンケート調査を行った。

自分の家庭生活の問題点に気付き、その解決のために自ら取り組んでいることがあると答えた生徒は半数以上いた。しかし、その問題点の多くは食生活に関することであった。

また、「家庭生活で問題に感じていることはありますか。」という問いでは、食生活に次いで地域との関わりに問題を感じている生徒が多いことがわかった。さらに「どのようなことを問題に感じているのか。」という具体的な問いでは、「どの様に関わればよいのかわからない。」「何を実践したらよいのかわからない。」との回答も多く見られた。《図１》このことから、地域との関わりに問題があることに気づいている生徒は多いものの、具体的な問題点に気づけるほど地域のことを知らず、関わりを持っていないことが分かった。

《図１》南部地区生徒８，５００人アンケートより



（２）目指す生徒像

> これからの生活を展望して、よりよい家庭生活の実現に向けて、主体的に課題解決に取り組み、生活を工夫・創造し実践できる生徒

県の研究テーマ『未来社会を切り拓くための資質・能力を育む学習指導』の研究を受けて、本分科会では「未来社会」を〈将来の自分と今の家族〉〈将来の自分の家族〉〈将来の自分と今の地域〉〈将来の自分の地域〉、「切り拓く」を〈変化していく社会に対応する〉〈変化していく家族の形に対応する〉〈変化していく地域に対応する〉と、捉えて研究を進めた。

これらを発展させ、本分科会では研究テーマを

『主体的に自立と共生を目指すことのできる生徒の育成～家族・地域とのつながりにおける問題解決的な学習を通して～』と設定した。目指す生徒像においても「家庭生活の変化に見通しを持ち、よりよい生活の実現に向けて、主体的に課題解決に取り組み、生活を工夫・創造し実践できる生徒」とし、習得した「知識及び技能」を活用し、思考、判断、表現することにより、これからの生活を展望して、主体的に問題を解決する力を育成したいと考えた。

（３）研究仮説

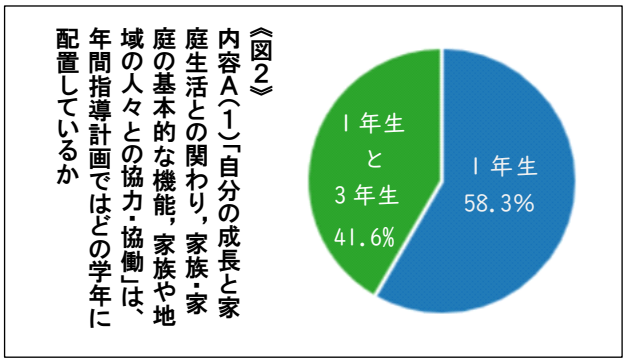
> 将来の家庭生活を展望するなかで、問題を発見し、見通しを持って課題を解決していく学習過程による学びを繰り返すことで、主体的に生活をよりよくしようとする力が身に付くであろう。

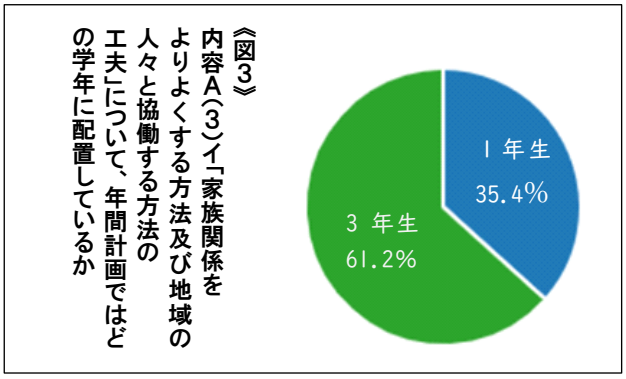
生徒が生活する空間軸である「家庭・地域」と、時間軸「主にこれからの生活を展望した現在の生活」を意図的に関連させ、生徒が「家族・地域・社会の一員」であることを自覚し、様々な問題を自分事として捉えて課題を設定し、解決していく学習過程を繰り返すことで、自らの生活を、主体的によりよくしようとする能力や態度が身に付くであろうと考えた。

３　研究内容

（１）教員へのアンケート調査

南部地区の教員対象のアンケート調査を行い、①内容Ａ（１）ア【自分の成長と家庭生活との関わり、家族・家庭の基本的な機能、家族や地域の人々との協力・協働】《図２》、②内容Ａ（２）ア（ｱ）【幼児の発達と生活の特徴、家族の役割】（ｲ）【幼児の遊びの意義、幼児との関わり方】イ【幼児との関わり方の工夫】、③内容Ａ（３）ア(ｱ)【家族の協力と家族関係】、(ｲ)【家庭生活と地域との関わり、高齢者との関わり方】、④内容Ａ（３）イ【家族関係をよりよくする方法及び地域の人々と協働する方法の工夫】《図３》について、年間指導計画ではどの学年に配置しているかを複数回答で尋ねたところ、①は解説に示されているとおり、【家族や地域の人々との協力・協働】については、１年生で配置し、さらに３学年でも他の内容と関連させて配置していた。②では、大多数が３学年もしくは２学年、③④においては、１学年もしくは３学年で学習するとの回答を得た。さらに「幼児とのふれあい体験」について尋ねたところ３学年が２学期に幼稚園もしくは保育所で実施をする学校が多いことも分かった。





（２）年間指導計画の再検討

本分科会では、「家族・家庭生活」を家庭分野の学習内容ＡからＣと関わらせて学習を進めることが、よりよい生活を営むために大切であることに着目し、改めて内容Ａの年間指導計画のしめる学習時間の平均１５．３時間（南部地区令和２年度教員アンケートの結果より）を見直した。

内容Ａでは、他の内容との関連を図りながら学習に取り組むことで、多角的に「家族・家庭生活」を捉え、内容Ａにおける目指す生徒像の「主体的に課題解決の取り組む生徒」の実現により近づけるのではないかと考えた。

以上の点から、内容Ａと他の内容を関連付けた年間指導計画案が《図４》である。

また、内容Ａの学習においても、小学校からの学びの積み重ねと、高等学校への系統性を意識し、家庭や地域との関わりや自らの生涯への展望を持つという視点から学習内容を構成していきたい。

《図4》内容Aと他の内容を関連付けた指導計画

（３）パフォーマンス課題～もしもシリーズ～

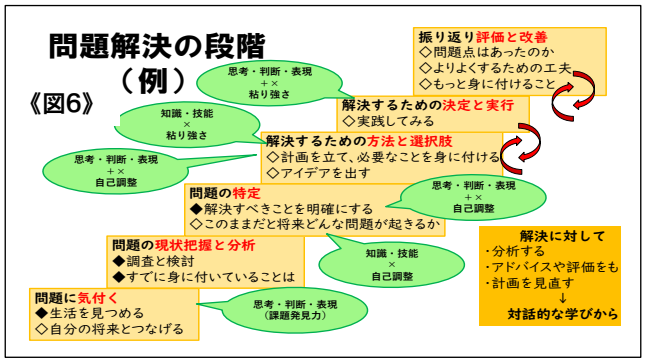
本分科会の研究テーマを受け、生徒が見方・考え方を働かせて、問題への向き合い方の思考を整理し、問題解決の過程をくり返しながら、知識や技能を習得することにより、生涯にわたって、自らや共生する人との生活をよりよくしようという主体的かつ実践的な意欲が持てるであろうと考えた。

生徒はパフォーマンス課題である「もしもシリーズ」で、様々な状況を想定しながら問題の解決に向き合う。その中では現状の自分が知っていることや身に付いていること、解決後にはどんな自分になりたいのかなどを深く考え、課題を設定することになる。そして解決のために知識や技能を主体的に身に付け、よりよい解決のために調べたり、話し合ったりするなどして方法を考える。そのためには、学習過程に必要な題材設定や、時数の見通しは欠かせない。そこで指導計画では、３年間を見通し、他の内容と関連付けながら、段階的に「もしもシリーズ」を配置することにした。

パフォーマンス課題の設定では、生徒自らが、「もしも〇〇になり、自分で〇〇しなければならなくなったら・・・」《図５》のように、各内容と家族・家庭を関連させ、身近な問題を解決する学習内容を意図的に設定することで、得た知識や技能を活用する主体的な学びへとつなげることを図っている。

《図5》パフォーマンス課題～もしもシリーズ～

このように、パフォーマンス課題に繰り返し取り組むことで、課題に即し、資質や能力を向上させるだけではなく、課題解決の過程を繰り返し経験することにより、さらなる課題の発見と実践意欲につなげ、その後の学習や生活を主体的によりよくしようと取り組む生徒を育成したい。《図６》



（４）資質・能力を育成する題材の授業設計

これまでの教員及び生徒の実態調査等により、題材の導入で、生徒が自分の生活を振り返って問題を発見し、課題を設定する場面をつくること、そこから生徒の思考の流れに沿いながら、問題解

決的な学習の過程で、知識・技能の習得が活用できる概念や技能となっていることが重要であり、主体的に学習に取り組む態度の涵養へとつながるであろうと考えた。

資質・能力の育成に向けては、題材全体を見通し授業設計をすることが大切である「授業設計に必要な要素」として「見方・考え方をはたらかせるための工夫」及び「主体的・対話的で深い学びの視点に基づく学習活動」の視点から、内容Ａの題材における学習過程の一覧表を作成した。《図７》

この表の作成にあたり、①学習指導要領の目標に記載の育成する資質・能力、②小・中・高等学校との系統性等《図８》を明確にし、教師の指導と評価を一体化させるようにした題材を通して、生徒が見方・考え方を働かせながら学びを深め、資質・能力を身に付けるための表の作成を通し、研究を深めることができた。

今後は、この表の「学習の過程」に沿って授業設計を行い、より効果的な問題解決的な学習から、資質・能力の育成を図っていきたい。

《図7》題材の授業設計の作成例

《図8》内容Ａにおける小中高の系統性

４　成果と課題

（１）成果

教員向けのアンケート調査により、内容Ａでの課題と実践に取り組む例が少ないことが判明した。指導計画を検討し、配列を見直すことにより、生徒の主体的な課題設定や実践的な取組につなげたいと考えている。改善の必要性はあるが、今後を見通す考え方を得ることができた。

さらに、教員や生徒の実態把握から、内容Ａと他の内容を関連させた指導計画の再検討とともに、問題解決を図る授業の柱として「パフォーマンス課題～もしもシリーズ～」を設定することとした。生徒が、自分自身の生活の中から問題を見いだし、主体的にその解決に取り組むことにより、生活の改善のための工夫や積極的な実践につながることを目指した授業設計に向けて研究を進めることができた。

（２）今後の課題

令和８年度の埼玉県大会まで、「指導の個別化」、「学習の個性化」、「協働的な学び」を軸として、更なる研究につとめていく。そして、常にＡ「家族・家庭生活」は家庭分野の学習の土台となることを意識した研究を進めていく。具体として、自己調整と粘り強さを可視化したワークシートの構成の検討や、専門委員を中心とした研修を実施していく。

今後、さらに情報の共有などの活動を通して、主体的に自立と共生を目指すことのできる生徒の育成に向けて、地区全体で指導力の向上のために研鑽を重ねていく。

５．参考文献

１）文部科学省：
中学校学習指導要領解説技術・家庭編
（平成２９年告示）

２）埼玉県中学校教育課程実践事例
（令和５年３月）

３）埼玉県中学校教育課程指導・評価資料
（令和３年３月）